

白隠禪師『^{ヲニ}於^ア仁^ザ安^ミ佐美』(1751)にみる 「健康」の語の使用

平尾真智子

順天堂大学医学部医史学研究室

1. 研究目的

「健康」という語の使用に関する先行研究には、青木純一他、「健康」の語誌的研究，2007，杉浦守邦，再度「健康」という語の創始者について，医譚，2011，がある。このなかで青木らは、白隠禪師の仮名法語『夜船閑話』（1757），序の「健康」の語2ヶ所使用を初出としているが、杉浦はこの序は白隠自身によるものとは認められないとしている。白隠禪師の著作は多く、仏教の教義のほか健康や長寿、病氣、看病に関する著作もある。本研究では、「健康」の語の使用に関し、白隠禪師の他の仮名法語や著作を調査し、健康の語の使用状況とその意義を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

原本影印が収録され、白隠の仮名法語に関する最新の研究成果である花園大学禅文化研究所（訳・註芳澤勝弘）編、『白隠禪師法語全集』全14冊（2003）を主な研究対象とした。その他に龍吟社『白隠和尚全集』全8巻（1934）も参照した。

3. 結果

白隠慧鶴（1686–1769）は、臨済宗中興の祖と称される江戸中期の禅僧である。駿河国原宿（現静岡県沼津市原）にあった長沢家の三男に生まれ、15歳で出家し諸国を遊方し修業を続け、病にかかっても内観法で回復し、道鏡慧端の指導で悟りを得た。また禅病を治す治療法を考案し若い修行僧を救った。地元に戻って布教を続け衰退していた臨済宗を復興させた。禅の教えを表した達磨図などの禅画を多数描いた人物である。84歳で遷化。後桜町天皇より神機独妙禅師の諡を賜い、明治17年に明治天皇より正宗国師と追諡された。

白隠の著作にみられる「健康」の語の使用を調査したところ、つぎの8著作16ヶ所に使用が確認できた。カッコ内は著作の年代と使用回数である。『於仁安佐美』（1751）（4）、『隻手音声』（1753）（1）、『辺鄙以知吾』（1754）（2）、『三教一致の弁』（1754）（2）、『夜船閑話』（1755，1757）（3）、『毒爪牙』（1758）（2）、『仮名葎』（1759）（1）、『さし藻草』（1760）（1）。このうち、『毒爪牙』は白隠の代表的漢文語録『荊叢毒薬』の拾遺文に付されている短文の漢文体の語録であるが、他は仏教の教えをやさしく説いた和文体の仮名法語である。「健康」には「ケンカウ」または「けんこう」のふりがなが付されていたが、ふりがなのないものもあった。

4. 考察

白隠の著作は多方面にわたり、自筆の文書は50種を数える。漢文体の語録、古典の講義や著語からなる提唱録、漢文体の自叙伝、和文体の「仮名法語」、俗謡風の説教などがあり、他に書簡、墨蹟、禅画などもあり、超人的ともいえる著作活動を行っている。

白隠の著作には健康法、養生、看病に関する教えを説いたものもあり、『夜船閑話』は今日まで読み継がれている。白隠は『辺鄙以知吾』などの著作で藩主に対し、仁政には長寿・健康が必要であると説いており、禅画のなかには人物の着物の模様「寿」（いのちながし）が描かれ、重要視している。自身も禅病回復の体験と長寿（84歳）を保つ健康・養生法を実践している。

「健康」の用語は仏教用語辞典には未掲載で仏教用語ではない。また古語辞典にも未掲載で古語にも含まれない。白隠の「仮名法語」における使用では、「健康」は今日的な心身の健康の意味の他に領地・国にも使用されていた。また「健康」と同様の意味で「堅剛」という語も使用していた。

5. 結語

白隠禪師が寛延・宝暦期に著わした8著作16ヶ所に「健康」の語の使用が確認された。そのなかで、白隠禪師が中御門天皇の皇女である門跡の姫宮に与えた法語『於仁安佐美』（1751）での使用が早かった。「健康」の語は江戸中期の仏教者、白隠禪師の「仮名法語」等の著作で心身の健康の意味で随所に使用されており、その使用は1751年まで遡ることが明らかとなった。

（本研究は2014年度武田科学振興財団杏雨書屋研究奨励研究の一部である）